

日本比較文化学会中部支部
令和4年度例会
発表抄録

日時 令和5年 3月26日(日)

会場 浜松学院大学布橋キャンパス

日本比較文化学会中部支部

日本比較文化学会 中部支部 令和4年度例会

I 例会日程 令和5(2023)年3月26日(日)

II 例会スケジュール 13:00~16:30

○12:50~ Zoom 会議受付

○13:00~ 開会の挨拶(中部支部長:白鳥 絢也)

○13:05~ 研究発表

○16:15~ 総会

閉会の挨拶(中部支部副支部長:澤田 敬人)

※オンライン発表へ参加される方は、発表開始時にはマイクをミュートにして臨んでください。(発表者を除く)

※同じく、カメラでの顔出しもご遠慮ください。(発表者を除く)

※同じく、発表の録画はご遠慮ください。

教育課程の変遷を見つめる その3

－「学習指導要領（試案）」（昭和22・26年度版）に着目して－

白鳥 絢也（常葉大学）

わが国の教育課程変遷の大きな流れを抑え、学習指導要領の求めるものを改めて捉え直していきたい。今回は、（試案）の段階である「昭和22年度版」及び「26年度版」を抑えていく。また、発表者の担当科目「教育課程論」における取り組み（「コメントシート」を活用した教員（発表者）と学生との対話）についても触れていく。

1947（昭和22）年の学習指導要領（総則）は、同年3月20日に刊行され、小学校・中学校における教育の目標、教科課程、学習指導法、学習結果の考察等が明記されている。わずか52ページの薄い冊子である。また、表紙には（試案）の文字が印字されている。また、戦前の内容からの改訂について概略を示すと、以下の通りである。

（小学校）修身、公民、地理、歴史は廃止。「社会科」の新設。家事科（女子児童のみ）廃止。「家庭科」を男女共に5・6年生で新設。教科「自由研究」新設。教科の発展、クラブ活動、当番・学級委員等。（※現在の「特別活動」）

（中学校）外国語、習字、職業、自由研究が選択科目に。

（新制高等学校，S23.4）大幅な選択教科制、単位制の導入。①大学進学のための準備課程，②職業人の準備課程，③実業課程

1951（昭和26）年の学習指導要領（総則）における改訂の背景は、①「学習指導要領使用状況調査」を行い、その結果を反映したことと、②「教育課程審議会」が設置され、教育課程に関する研究・調査・審議が専門家の集いによって検討されるようになったことが挙げられる。「学習指導要領使用状況調査」は、昭和22年度版学習指導要領の冒頭1・2ページにある「試案」の性格の説明において「続々と意見を寄せられ……」の箇所に応えたものである。実際、現場から文部省に多くの意見が寄せられ（具体的な時間割の立て方を示してほしい、授業時数の根拠を示してほしい等）、その寄せられた質問や要望にできる限り応えた形となっている。そのため、ページ総数は107ページと倍増している。

昭和26年度版で最も大切なポイントは、ある用語の変化にある。それは、22年度版では「教科課程」という用語を使用していたが、26年度版からは「教育課程」という用語に変更されたことである。これは、新しい「教育課程観」の誕生を意味している。つまり、日本独自の教育課程の誕生といっても過言ではない瞬間だったともいえよう。

パール・バックと林語堂

—二人が見つめた中国—

野田 晃生（前・河北外国語学院大学）

本発表においては、中国、米国を中心活動した二人の人物である、パール・バックと林語堂について考察を行う。

パール・バックは、米国に生まれてすぐに中国に渡り、そこで長きに渡って過ごした。彼女は、『大地』をはじめとする中国を舞台とする多くの作品を発表した。米国人だったバックであったが、彼女の心は中国にあった。そして、彼女は、その生涯を通して、中国を見つめた。

中国に生まれた林語堂は、アメリカに渡り活動を行った。彼は、バックの推薦を受け、多くの中国についての著作を発表した。

本発表においては、パール・バック、林語堂の二人の著作、活動を読み解くことによって、二人が中国をどのように見て、考えていたか、についての考察を行う。二人は、著作、活動によって、中国、そしてアメリカを批判した。その批判を、今日を生きる我々は、どのように受け止め、評価するべきであるか、について考察を行う。

二人共、多くの文学作品を遺したが、中国、アメリカの文化を紹介すると共に、両国の友好にも尽力した。

また、二人は、中国文化、歴史についての評価を行い、それを発表、紹介した。そのことによって、中国は世界の人々に知られるようになった。

中国の歴史について見ると、二人が生きた時代に、文化大革命があった。これは、中国国内における大量虐殺行為、破壊行為であり、大勢の中国人が命を落とし、中国の文明が破壊された。

パール・バック、林語堂の両名共、文化大革命には大変な恐怖感をもっていた。その事態を、少しでも解決しようと、二人はペンをとったのである。パール・バック、林語堂の二人は、文化大革命から中国が立ち直り、国家として未来へのまなざしを持つことができるように回復することを望んでいたのである。パール・バック、林語堂の両名とも、その以前から続く、長きにわたる中国の歴史に思いをはせ、その未来に希望を抱いていた、とすることができるであろう。

本発表においては、二人の中国に対する姿勢を検討する。

「選ぶ女」をめぐる一考察

－『美女と野獣』と『オペラ座の怪人』の比較を通して

水町 いおり（中京大学）

本稿では、『美女と野獣』のヒロインベルと『オペラ座の怪人』のヒロインクリスティーヌの「選択する」行為に着目して、ジェンダーの視点から考察を行う。

『美女と野獣』は、主人公ベルが、魔法によって野獣の姿に変えられた王子の卑屈で頑なな心を溶かし、彼女の愛が野獣を人間に戻すことという物語である。一方、『オペラ座の怪人』は、恐ろしい容姿のエリックが、オペラ座の新人歌手クリスティーヌに恋するものの、彼女の愛は幼馴染のラウルに向かい、エリックは失意の中で彼女のもとを去るという物語である。

この二作品は、恋愛における根源的かつ恒久的なファクター、すなわち個人の持つ外見状の価値と内面の豊かさを比較した場合、どちらに優位性を与えるかという点において、類似性が見られる。ストーリーにおいては、社会的地位を持たない美しい女性主人公が、財力や能力を持つものの、容姿が醜悪な男から求愛されるという点で、この2つの物語の中心的議論は同じなのである。しかし、唯一異なるのは、ベルは野獣を選び、クリスティーヌはエリックを選ばなかったことである。その理由は何に起因するのだろうか。そこで、本稿では、ヒロインたちの「選ぶ」という行為に着目し、彼女たちの選択に与えられた意味を、ジェンダーの視点から考察したい。

そもそも、人は、自らの幸福のために、さまざまな取捨選択をして生きるものである。しかし、一方で、自分のための選択が許されない時代や環境がある。そして、歴史上、何かを選択する際には、女性は、男性と比較すると、自分のための選択ができない環境にいたことは周知のことである。筆者は、「選ぶ」という行為は、個人の自由な意思決定に基づくものでありながら、社会的な負荷を負っていると考えている。恋愛における根源的なテーマに類似性を持つこの二作品を、「選択する」というテーマに沿って、ジェンダーの視点で分析することで、両作品の新しい解釈を示すことを、本稿の目的としたい。

海外短期留学プログラムにおける「オンライン事前交流」の効果について

二村 洋輔（至学館大学）

本発表では、2023年3月に至学館大学が企画し実施した海外短期留学プログラムにおける、「オンライン事前交流」の効果について報告する。

海外短期留学プログラムについての先行研究の中では、異文化理解と学習動機付け、専門教育への寄与、教育的効果、長期留学希望との関連性等、様々なテーマについての報告がなされてきた。これらの研究によって得られた知見は、大学における言語学習や教育などの質をより一層高めていくための海外短期留学プログラム開発を行なっていく上で有益なものである一方、近年の新型コロナウイルス流行後急速に整備されたICT環境など、大学における学びのあり方が劇的に変化しつつあるという現在の状況を前提に企画・実施される海外短期留学プログラムに関しては、検討する課題は山積している。

今回至学館大学では、2023年3月5日から15日までの11日間、マレーシアのクアラルンプールにおいて海外短期留学プログラムを実施したが、同プログラムにおいては、ZoomおよびPadletを活用した「オンライン事前交流」が導入された。参加学生たちは、マラヤ大学言語学部日本語専攻の2年生、3年生の学生と2月27日から3月14日までの期間、オンライン上で事前に決定したテーマについて活動を行い3月14日の対面交流の際に、その成果を発表した。

本発表では、上述の「オンライン事前交流」が、対面交流を行う上で、どのような効果を果たしたのか、交流会での参加者たちの様子をもとに考察する。ICTの活用は学びにおいて利点となることも多いが、同時にその陰で犠牲になるものもあるのではないだろうか。そのようなことを念頭に、海外短期留学プログラムにおけるICT活用の可能性を考察するとともに、その弊害の可能性についても考察する。

浜松市に伝わる伝統芸能の継承について、 地域の大学生 NPO の取り組みの成果と課題ー地域経営の視点から

田島 喜代美（常葉大学）

要旨

「地域経営」とは、地域の持続的な発展を目指すために経営の手法を取り入れることであり、地域の多様な資産を活用し、その価値を向上する取り組みである。本研究では、静岡県浜松市に伝わる、浜松市指定無形民俗文化財「勝坂神楽」、および国指定重要無形民俗文化財「川名のひよんどり」の継承について、地域の大学生 NPO 法人の取り組みを事例に、地域経営の視点から考察する。

背景

静岡県浜松市の伝統芸能の多くは、中山間地域に伝えられているが、少子高齢化、文化の多様化また、近年の新型コロナウイルス感染症拡大による祭礼の中止により、その存続が危ぶまれている。その中で、地域の大学生が NPO 法人を設立し、その継承に取り組んでいる。

目的

本研究では、地域の大学生が中心となり設立した NPO 法人による、伝統芸能継承の取組を、地域経営の視点から分析することで、今後の学生 NPO 法人の持続可能性を検証する。

方法

大学生 NPO 法人および伝統芸能保存会の参加観察、インタビューを実施した。また、NPO 法人の経営分析を行う。

結果

大学生 NPO 法人の存在は、中山間地域の伝統芸能において、若者が離れ高齢化する地域のなかで、大きく寄与している。また大学生ならではの視点で ICT を活用した情報発信など、新たな取り組みを積極的に行っている。その一方で、その組織体制は、希薄なコミュニケーション、人員の入れ替わりやキャリア形成の過渡期によるゆらぎなど、現代社会における若年層特有の文化、課題を抱えており、保存会と緊密で継続的な連携が不安定である。

結論

大学生 NPO 法人は伝統芸能の継承において有効な取り組みを行っているが、地域経営の視点からはその組織の不安定さから、多くの課題を抱えている。しかし、伝統芸能の継承に取り組む大学生 NPO 法人存在自体が伝統芸能、そして地域の資源となり価値であると捉え、地域全体で育成していくことが、地域の持続的な発展につながると考える。

Field Study Report on Learning Support for Ethnic Minority Students by High Schools and Universities in Silicon Valley Area

津村 公博（浜松学院大学）・田島 喜代美（常葉大学）

要旨

ふじのくに地域・大学コンソーシアムの令和4年度共同研究助成のテーマを基に、米国カリフォルニア州シリコンバレー地域の大学や高校におけるエスニックマイノリティの教育支援に関する取り組みについてヒアリング調査を中心に行った報告である。

1. 背景 日系4世・5世問題を公立学校の在籍推移

✓ 1991年、2008年、2015年

✓ 中学校の在籍者率

(1) 同化教育 (2) 義務教育の不適用

2. 研究の目的

本フィールドワークの目的は、シリコンバレー地域の大学や高校におけるエスニックマイノリティの教育支援から、Cooperative Online Learning Program (COLP)の有効性を確認することである。

3. 方法

1	March 7 March 8	Cristo Rey San Jose Jesuit High School (1) Cristo Rey San Jose Jesuit High School (2)
2	March 9	Stanford University Medicine
3	March 11	A Senior Analyst in the field of autonomous automobiles

4. 結果

1	Cristo Rey San Jose Jesuit High School	Technology Integration in Education
		Fine arts programs
		Paid corporate internships
2	Stanford University Medicine	Paid Corporate Internships for High School Students
3	A Senior Analyst in the field of autonomous automobiles High schools in Silicon Valley	Technology
		Diversity
		Entrepreneurial Spirit
		Cooperative online learning program (COLP)
		Social entrepreneurship education

5. 考察 Discussion

(1) 私立学校の取り組み

(2) 公立学校の取り組み

(3) COLPの有効性

(4) ICT技術・アート・インターシップ

(5) 大学の取り組み Social entrepreneurship educationの導入

6. 結論

ブラジル連邦共和国・フィリピン共和国にルーツがある日系人が公立小中学校において学力定着や適応に困難にあるなか、米国カリフォルニア州シリコンバレー地域の大学や高校におけるエスニックマイノリティを対象とした本フィールドワークの結果、COLPの有効性に加えて、多くの視座が与えられた。

消滅危機言語の認識と課題：タイ山岳民族の事例から

樋口 謙一郎（梶山女学園大学）

言語消滅の要因は、しばしば指摘されるような、大言語やリング・フランカの拡大に伴う母語喪失、言語交替にとどまらない。本発表ではタイの山岳民族（山地民）を事例として、消滅危機言語の認識と課題を考察し、問題の把握に「現地」の視点に立ったアプローチが求められることを述べていく。

タイにおいてタイ民族は総人口の約 85%を占める。このほかに華人、山岳民族や移民もいる。タイ政府は長らく各種の少数民族政策を実施し、それによる国籍付与やタイ語普及は、少数民族の市民性および生活水準の向上・安定に寄与してきた。

ここで問題になるのがタイにおける「国家」と言語文化の関係である。本発表で注目する山岳民族の研究においては、彼らの「近代国家（あるいは近代文明）との邂逅」「部族社会がいかにかこの文明との邂逅を内面化し近代国家に包摂されていくか」が重要なテーマであり続けた（片岡 2013）。

これに関するタイの歴史的背景としては、第 1 に、山岳民族が歴史的に「森林破壊者」「麻薬生産者」「隣国出身の共産主義者」という「非タイ的分子」イメージを余儀なくされてきたこと（トンチャイ 2003）、第 2 にタイにおける「民族、仏教、国王の一体性」の重視が考えられよう。かような状況で山岳民族政策に対しては海外の研究者などから同化政策との批判が寄せられることも多かった。一方、タイの専門家はこの同化政策の強制性を否定することで反論してきたが（片岡 2013）、強制的か自発的かという政策的問題とは別に、山岳民族の言語の消滅という文化的問題が現実存在することは明らかである。

以上の問題意識を抱えて、発表者は近年タイの研究協力者との意見交換や、山岳民族居住域への訪問を重ねてきた。本発表ではその一部を紹介し、上述の議論を深めたい。

主要参考文献

- ・片岡樹（2013）「先住民か不法入国労働者か？：タイ山地民をめぐる議論が映し出す新たなタイ社会像」『東南アジア研究』50-2、239-272 頁
- ・トンチャイ・ウィニツチャクン（2003）『地図がつくったタイ：国民国家誕生の歴史』石井米雄訳、明石書店
- ・村嶋英治（1987）「現代タイにおける公的国家イデオロギーの形成：民族的政治共同体(チャート)と仏教的王制」『国際政治』84、118-135 頁